

■ ジョウゼフ・コンラッド協会(英国) 第42回年次大会

「初代会長のヨーコ（奥田先生）、2代目のユミコ（岩清水先生）のことはよくご存知だと思います。でも3代目の私を見て、皆さんは『誰？』とお思いのことでしょう。日本では『3代目は会社を潰す』と言われていますが、そうならぬよう、日本におけるコンラッド研究の繁栄のために微力ながら貢献できればと思います…」研究発表に先立ち、日本コンラッド協会3代目会長としてそんな挨拶をした。苦笑交じりの温かい激励の拍手をいただいた。

2016年6月29日から7月2日まで、エジンバラ・ネピア大学で開催された The 42nd Annual International Conference of the Joseph Conrad Society (UK) に出席した。個人的には同学会には2年前の第40回大会（ケント大学）以来、2度目の参加となった。今回の学会前に、大きな出来事が2つ起こった。まず、ちょうど前の週の金曜日に国民投票で英国が EU の離脱を決定した。いわゆる Brexit である。現地で言葉を交わした英国の方は、今回の決定に戸惑いの念を隠さなかった。EU 統合による移民の流入に職を奪われることに我慢ができない国民の不満が今回の結果をもたらしたという。そんな時期の渡英は、ポーランド（しかも当時は独立国家として存在すらしていなかった）移民による文学を英文学として研究することの意義を改めて考えさせられた。次に、本協会の前身であるコンラッド研究会の創設に大きな貢献をされた John Stape 氏が、長い闘病生活の末、本学会の直前に他界された。氏のことは当然本学会でもたびたび話題に上り、氏への賛辞で始まる発表も見られた。今後も本学会の中で氏の業績と遺志は生き続けていくことが確信された。

参加者は約40名。英国、ヨーロッパ各国、北米、中国、香港、シンガポールなど、前回参加した時と同様に、今回も様々な国からの研究者が集ま



った。今回の特徴としては、これまでのパラレルセッションから、シングルセッションへの変更が挙げられる。延べ4日間、世界的に有名な研究者から気鋭の若手研究者まで、同じコンラッド研究者として一同に集い、様々な切り口の発表を聞き、意見交換を行った。発表準備のため残念ながら席を外したセッションを除き、ほぼすべての発表を聞くことができた。



プログラムは2～3件の発表を1セッションとして括る例年通りの形式で、各セッションでは、それぞれに異なる研究発表が疑似シンポジウムの様にまとめられていた。1日目は、オランダやフランスの文学・翻訳・写真とコン

ラッド作品を絡めた“The Art and the Life”、コンラッドの描くラテンアメリカ、ベンヤミンを使ったコンラッド作品の読解、各国作家への影響を扱った“New Ways of Reading Conrad”があった。2日目は、映画的思考、伝説、挿絵からコンラッド作品を論じた“Representing Conrad: Source and Image”、コンラッド作品における女性像およびフェミニスト批評中心の“Reading Woman”、政治的観点からの“Political Conrad”、文学理論系の“Constituting Character”、そして夕方にはBBCドラマ *The Secret Agent* のプロデューサーである Priscilla Parish 氏を迎えての映像セッションが催された。3日目はコンラッドと同時代の科学技術との関係を扱った“Conrad and the Technological Age” (筆者の発表を含む)、作家の英語の特徴や原稿の編集過程を分析した“Language, Style, and Editing”の2セッション。最終日の4日目は、斬新な手法でコンラッド作品を読む“Representing Conrad: Reading Strategies”、そして大会を締めくくったのはモダンティヤインドの気象学などとの関わりを論じた“Modernity, Meteorology, and Marlow: Rereading Conrad”だった (これに関してはテーマ的な共通性というよりも、頭韻による括りが秀逸だった)。これらの中には、コンラッド作品の緻密な読みを前提としながらも、日本の英文学研究者にはなかなか発想の及ばないユニークな切り口の発表も多く、その意味でも大会に参加する意義は高いと感じられた。

もちろん、コンラッド研究者同士の交流の場としての本学会の側面も忘れてはならないだろう。筆者は出席できなかったが、1日目の夜には開催校の Linda Dryden 氏の自宅にてバーベキューが催され、大変盛況だったと聞く。筆者は現地での宿泊手段としてエジンバラ・ネピア大学の寮を利用したので、同じフラットに宿泊した参加者の方々とは、特に親睦を深めることができた。今回は直前にルブリンの学会があった影響もあり、日本からエジンバラの学会への参加は筆者のみとなったが、次回のロンドンの学会はより多くの会員が参加することを期待したい。



(えのきだ かずみち 広島大学 准教授)